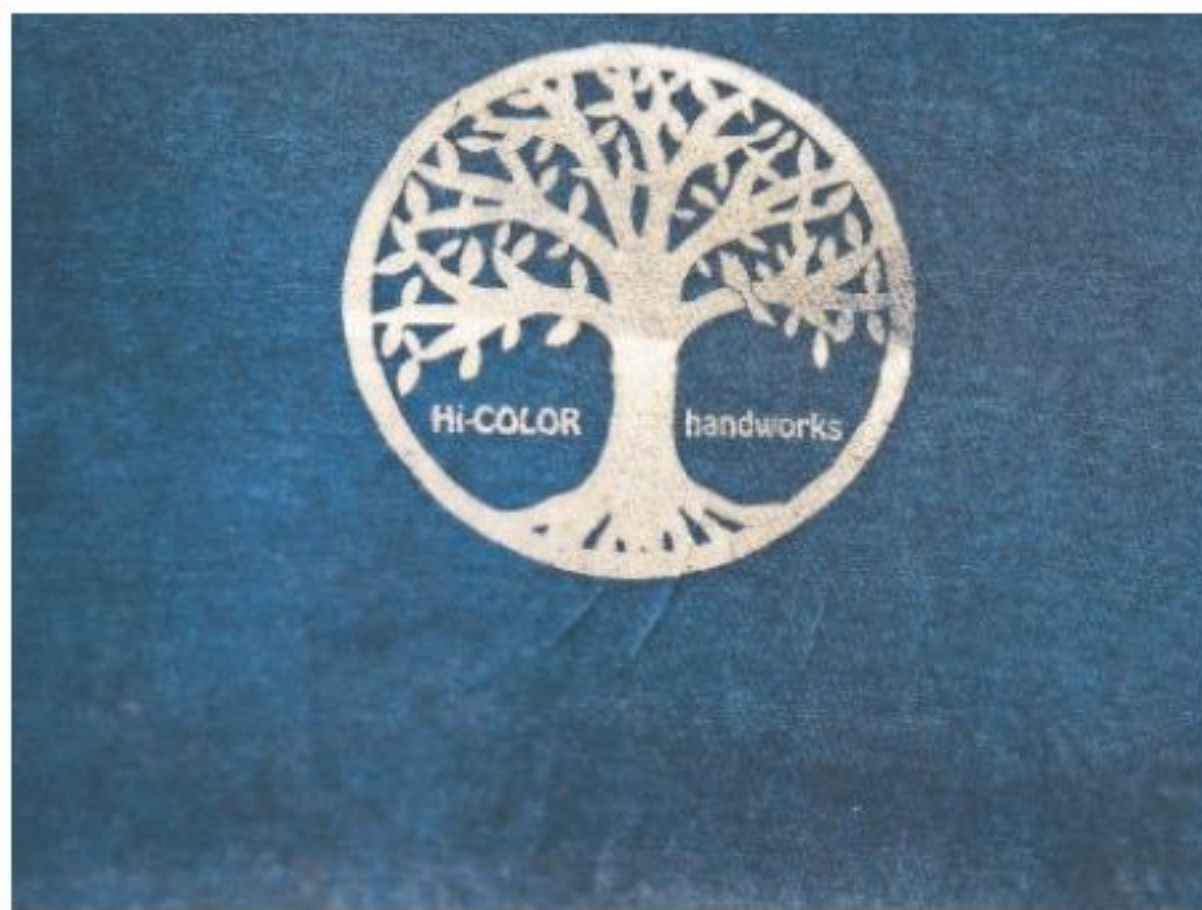


こだわりの土が育む



【上】成長した藍の葉を収穫する庄司拓也さん（左）と妻の愛鐘さん＝海陽町熱田
【右下】藍染のドレス。庄司さんは「生きている服」と表現する
【左下】「ハイカラーハンドワークス」のロゴマーク



康について真剣に考えるようになった。千葉県を経て、より良い環境を求め、12年に阿南市に移住。この頃、抗菌作用のある藍染がアトピーにも効果があると聞き、興味を持った。

息子が肌着メーカー・トータス（海陽町）の藍染腹巻きを着用したところ、アトピーの症状が和らいだ。肌への刺激が少なく、痛くない。庄司さんは藍の効能を実感すると共に、健康と環境に配慮して藍の無農薬栽培にこだわる同社の理念に共感。入社して藍の栽培を任せられた。上板町の藍師の元にも通い、染づくりなど藍染の基礎を学んだ。

藍染の知識と経験を深めるほど魅力に引き込まれ、海陽町で藍師として生きる覚悟を固めた。「染づくりは職人技。気候や葉の状態によって水加減が異なり、

触った感じや匂いで覚えるしかない。失敗して泣く泣く大量の葉を捨てたこともあるが、思い通りにいかならぬから真剣になれる」

藍の代表的な生産地は吉野川流域で、海陽町の藍はトータスや庄司さんらの試みによって定着してきた。庄司さんは今後の課題として後継者の育成を挙げる。「各地で増える耕作放棄地を藍の畑に活用すれば、移住者を呼び込める。藍にはまだまだ可能性があり、挑戦したい人がいればノウハウを伝えたい」と笑顔で話した。（山口和也）

抗菌作用肌着に生かし



健康や環境に配慮した海部藍の腹巻きやストール。現社長の頼一さんは「今後も新商品を開発していきたい」と意欲を見せる

海陽で商品開発 「トータス」

庄司さんが藍の栽培を担っていた「トータス」は、1997年に大阪市で創業した老舗の肌着メーカーだ。1964年の東京五輪では、聖火ランナー用のランニングシャツを納入した実績もある。68年に海部工場（海陽町）を建設し、後に本社も現在の場所に移った。

主力商品は、遠赤外線効果のある特殊な糸で生地を織り上げた腹巻きなど。前社長の亀田洋三さん（故人）を中心に「肌着は第2の皮膚」という理念の下、健康と環境に配慮した製品づくりにこだわってきた。2000年ごろに洋三さんの妻悦子専務（83）が藍の抗菌作用に着目し、09年には藍の栽培から染色まで一貫して行う体制を確立。「海部藍」と名付けた。

（山口和也）